

白糠のアイヌ語地名

和天別川筋の アイヌ語地名

第2回

○イオロウシ
「イオロウシ」は、河原へ向かって駒越大橋の手前、右側から山が和天別川にせまっているところを指します。

「エ(頭)・ウオロ(水についている)・ウシ(ところ)」という意味で、山の先端が川に突き出ていることを表し、旧『白糠町史』のアイヌ語地名解には「川崎、川中に出た山崎」と記載されています。

同じ地名は茶路川筋にもあり、国道392号を北上し、高台地区の手前、御仁田へ向かう橋の右側にある「ガンケ」がそうです。

■駒越岬

1901年(明治34年)、軍馬補充部釧路支部が開庁し、このあたりは支部の用地になりました。イオロウシの奥にも放牧地が設けられました。イオロウシの出っ張りは、放牧する馬や人の行き来

にたいへん難儀な場所だったようで、軍馬補充部は、1923年(大正12年)、出っ張っている山を除去して川を切り替え、道路を新設することにしました。

工事は翌年完了し、山を削り、川には40メートルに及ぶ石垣を築き、その上に幅5メートルの道路ができあがり、このとき「駒越岬」と名付けられたという話が残っています。

【参考】『アイヌ語地名と原日本人』 附録「白糠町内会の由来一覧」

○ムキサニソーカ

「ムキサニソーカ」は、イオロウシの和天別川を挟んだ向い側一帯を言います。

白糠地名研究会は「ムク(ツルニンジン)・サ(根)・ネ(前になる)・ソ(帯)・カ(上)」から「ツルニンジンの根が帯のように重なって前にはえているところ」と訳しています。

す。このあたりには、一面にツルニンジンがあつたようです。

■ツルニンジン

ツルニンジンは、キキョウ科のツル性の多年草で、低地から山地の林の中や原野に生育し、7月から9月に鐘の形をした花が咲きます。花には紫色の筋や斑紋があります。

根の形が朝鮮人参に似ていることからニンジンと名がつけられました。茎を折ると出る白い乳液は、独特の臭いがありますが、切り傷やできものに効果があると言われています。根は、解毒や去痰、肺病に用いられるほか、食用にもします。

かつてはアイヌ民族の大切な食糧として、特に母乳が出ないとき、



▶ツルニンジン
転載・『新版 北海道の花(増補版)』
(北海道大学図書刊行会 1993年)

根を煎じた汁を飲んだり、乳房を冷やしたり、根を焼いたり煮たりして食べたとのこと。

別名を「ジイソブ」と言い、同じキキョウ科の「バアソブ」は、この別名に対してつけられたものです。

【参考】『新版 北海道の花(増補版)』、『全道版 アイヌ民族の有用植物 薬用・食用編』、『アイヌ民族の伝承有用植物に関する調査研究(第13報)』「ツルニンジンおよびバアソブの試作栽培と栄養成分分析」



出典：国土地理院ウェブサイト

白糠のアイヌ語地名

和天別川筋の アイヌ語地名

第3回
(最終回)

○シャチホロ川

「シャチホロ川」は、河原地区で和天別川から分かれて南西方向へ向かっている川です。

「シャチホロ川（乾いた）・ホロ（水）」という意味から、「水量の少ない乾いた川」のことを言います。

古地図には「シャチオロ」と記載されているものがありますが、白糠地名研究会は「サツ（乾いている）・オロ（ところ）」という意味で、シャチホロと同じく乾いているところを表すと説明しています。

■乾いた川

「サツ」が付く地名として、茶路川筋の「オサツペ」は、「オ（川尻が）・サツ（かれている）・ペ（ところ）」という意味があり、また、庶路川筋の「サツテクナイ」も「サツテク（干せている、乾い

ている）・ナイ（沢）」という意味で、どちらも水の流れが見えない川を表しています。

札幌も「サツ」がつく地名で、市のホームページでは、「サツ（乾いた）・ポロ（大きな）・ペツ（川）」と「サリ（その葦原が）・ホロ（広大な）・ペツ（川）」という2つの説が紹介されています。

北海道の名付け親として知られる探検家の松浦武四郎は『西蝦夷日誌』の中で、「サツポロはサツテポロの儀にて、多く乾くの儀。此川急にして干安き故也」と記し、アイヌ語地名研究家の山田秀三は、『北海道の地名』で、いくつかの説を分析して「サツ・ポロ・ペツぐらいに解するのが自然のような気がする」と、松浦武四郎の説をとっています。

【参考・『新版 蝦夷日誌』下「西蝦夷日誌」、『北海道の地名』】

○コイカクシワツテ

「コイカクシワツテ」は、「コイカ（東方の）・クシ（通る）・ウワツテ（和天別川）」という意味で、河原橋の南で西へ向かう和天別川から東に分かれて北上するコイカクシ（恋隠）川のことを言います。

■波が上を通る

貫塩喜蔵エカシは、『白糠のアイヌ語地名』でコイカクシについて「コイ・カは、波の上（かみ）と解すれば東方という意味になるが、コイ・カを波の上（うえ）と解することもできる。これにクシ

をつけると、波が上を通るという意味になる。津波が恋隠の火の見やぐらあたりまで押し寄せてきて、その名がついた」と、津波伝説をもとにした解釈を述べています。

コイカクシワツテは、アイヌの先人が、この地まで波が川をさかのぼった津波のことを知らせるために付けた地名かもしれません。

平成25年5月から、65カ所の地名を紹介して参りました「白糠のアイヌ語地名」は、今回は最終回です。長い間ありがとうございました。

